

# 明代初期の八股文について（4）

The Eight-legged Essay in the early Ming Dynasty (4)

滝 野 邦 雄  
Takino, Kunio

## （三）正統年間

### 商 輅

商輅（字は弘載，号は素菴，諡は文毅。浙江淳安の人。永樂十二年〔一四一四〕～成化二十二年〔一四八六〕。正統十年乙丑科〔一四四五〕の狀元）は，明朝の三元（郷試・會試・殿試の首席及第）として有名な人物である。土木の変の後に内閣に入る。景泰年間に兵部左侍郎となるが，英宗が復辟すると下獄して，庶民に落とされる。次の憲宗（成化帝）の成化三年（一四六七）に復帰し，内閣に入り，兵部尚書・戸部尚書・吏部尚書などを歴任する。『續資治通鑑綱目』の編者としても知られる。

俞長城は次のように評価する。

功業もて其の科名（試験の名誉）を稱されるは難し。已に功業もて其の科名を稱され，之に加うるに文章を以てするは難きの難き者なり。有宋の三元（郷試・會試・殿試の首席及第）に挙げられる者は三名（王曾・宋庠・馮京）①，俱に名臣と爲るも文の傳わること有る者鮮し。亦た越えて有明の洪武の時に瀾伯（黃觀）有り②，正統の時に文毅（商輅）有り。皆な三たび羣英に冠たり。然れども後世 文毅（商輅）を知りて瀾伯（黃觀）を知らず。豈に文の傳わる有り・傳わらざる有りを以てするに非らざらんや。文毅（商輅）既に大計を定め，忠肅（于謙）と名を齊しくす。〔英宗の〕復辟の後，幾ど禍に罹るも，脱するを得。奪門〔の變〕を辨明し，昭雪（冤罪をすすぐ）にして忠節あり。〔そこで〕人主 悔悟す。故に余（俞長城）

嘗て謂う、文毅（商輅）の生平 前に以て社稷を安んずる有り、後に以て君心を格<sup>ただ</sup>す有り。之を大臣と謂わざれば不可なり。本朝（清朝）士を取ること六十年、科名 未だ公と<sup>ひと</sup>埒しき者有らず。夫れ科名 何ぞ重んずるに足りん。顧だ其の功業文章を問うのみ。文毅（商輅）の斯の稿を讀むに、其れ必ず取る所の法有らん（俞長城「題商素菴稿」『可儀堂一百二十名家制義』卷之二・七十二葉～七十三葉・「商素菴稿」条）。

①三名：『宋史』卷三百一十七・邵亢・馮京・錢惟傳の論に「論に曰う、進士の郷舉より延試に至るまで皆な第一なる者は纔<sup>わず</sup>かに三人なり。

王曾・宋庠は名宰相と爲り、馮京は名執政と爲る。風節相い映じ、其の科名に愧じず……」。

②黃觀：初めは母の姓に従い許觀という。字は瀾伯、一の字は尚賓、福王の時に文貞と諡される。貴池の人。元・至正二十四年〔一三六四〕～明・建文四年〔一四〇二〕。洪武二十四年辛未科〔一三九一〕の狀元。靖難の變の時に殉死する。

ここでは、俞長城が、

意 確にして、法 密、氣 渾として、筆 古なり。真の〔明初の高級官僚の間に流行した〕臺閣〔體〕の文字なり（俞長城「題商素菴稿」『可儀堂一百二十名家制義』卷之二・七十九葉・「父作之子述之 商輅」条評語）。

と評した八股文を検討してみたい。題目は、

子曰、無憂者、其惟文王乎、以王季爲父、以武王爲子、父作之、子述之（『中庸』第十八章・第一節）

〔朱注〕此言文王之事、書言「王季其勤王家」（『書經』武成）、蓋其所作、亦積功累仁之事也。

の太字で示した箇所である。なお、この八股文は、選本によって異同がある<sup>(1)</sup>。拙稿は、趙國麟の『制義文統類編』（雍正六年〔一七二八〕刊）所載のものによる。また、この八股文は、いわゆる八股（提股・中股・後股・收股）によって議論を展開する箇所が、前股と後股とによって書かれている。これは、考証的な論述を

行なう時に用いられる形式の八股文である。

有創其統者<sup>①</sup>，有紹其統者<sup>②</sup>，此聖人之無憂也，  
蓋聖人以天下為心<sup>③</sup>，而無所承藉，則不免于創紹之勞矣，文王兼而有之<sup>④</sup>，此所以無憂與<sup>⑤</sup>，  
中庸引之曰，欲知文王之無憂，當觀上下之有賴，

①有創其統者，有紹其統者：『可儀堂一百二十名家制義』・『明文小題傳薪』は、「統」を「業」に、「紹」を「承」に作る。

②聖人之無憂：破題では代字を用いるので，この「聖人」は「文王」を指していると考えられる。しかし，清代になると「文王」は「周王」と代えるのが普通である。拙稿「清代八股文における破題・承題について」（『経済理論』第312号・2003年刊）の「(2) 破題における代字」参照。

③以天下為心：歐陽脩「易童子問」巻一に「童子問曰，「雷出地奮，豫。先王以作樂

／＼（1）『制義文統類編』の評で趙國麟は，次のように述べている。

此れ項廷堅の選ぶ所の『文紀』本なり。錢純中の『會元文選』本は，承題・收股 此れと全く異なれり。股中の「父則賢父」句は，錢本「父則作則者也」に作る。「子則聖子」句は，「子則善述者也」に作る。「父而作之如此」句は，下に「殆可謂之作之聖也」の一句を添ふ。對比[の「子而述之如此」句の下]には，「殆不止于述者之明也」の一句を添ふ。先に「父則作則者也」と點ずれば，題[目]を將って已に出盡すに似たり。未後の收股の添句は反って力無きを覺ゆ。寔に項本の「善を盡し，美を盡す」（『論語』八佾）に及ばざるなり。但だ項本は萬曆己丑（萬曆十七年〔一五八九〕）に刊し，錢本は萬曆丙申（萬曆二十四年〔一五九六〕）に刊す。皆な古本なり。未だ孰れが原本と為すかを知らず。因りて並びに之を存し，其の異同高下を辨ずること此の如し（『制義文統類篇』第十冊・商輅「父作之子述之」条・商三）。

錢純中の『會元文選』ではないが，『可儀堂一百二十名家制義』（巻之二・七十九葉・「父作之子述之 商輅」条）や『明文小題傳薪』（巻五・中庸・「父作之子述之」条・二十五葉）所収のものも，承題が，

蓋一創一傳之有人，文王之心慰矣，復何憂哉，

であり，起講が，

中庸引文王之事，以見道之費隱，謂夫欲知文王之無憂，當觀上下之有賴，

で，收股が，

吁王季作之于前，

武王述之于後，

文王之無憂如是夫，

となっている。

このように明代の八股文は，文の異同がよく見られる。後世の人たちは，容易に前人の八股文に手を加えているのである。特に明代初期の形式が整っている八股文は，後世の人たちによって，八股文の形式に沿うように加工されていると思われる。

崇德，殷薦之上帝，以配祖考」（『周易』豫卦・大象），何謂也。曰，於此見聖人之用心矣，聖人憂以天下，樂以天下，其樂也，薦之上帝祖考而已，其身不與焉，衆人之豫，豫其身耳，聖人以天下爲心者也，是故以天下之憂爲己憂，以天下之樂爲己樂。

④兼而有之：『禮記』儒行に「儒皆兼之而有之（儒 皆な之を兼ねて之を有つ）」。

⑤與：……「與」字は則ち疑いて疑わざる者の有る在り……（『讀書作文譜』卷之七・十七葉）。

是故

莫爲于前，後將何述，作之無其人可乎，惟我文王，以王季而爲父，父則賢父也，故其所以勤王家者，可以貽謀<sup>③</sup>，可以衍慶，積功累仁<sup>④</sup>，再傳之軌轍以立，修德凝命<sup>⑤</sup>，繼世之典刑以存，雖曰天命未迓也，駸駸乎國勢之既強，三分之業<sup>⑦</sup>，發其源矣，雖曰帝命未新也，勃勃乎王靈之已振，九州之大，開其端矣，父而作之如此，則凡文王之一張一弛，孰非王季所創者耶，

① 無其人：韓愈「對禹問」に「得其人而傳之，堯舜也，無其人，慮其患而不傳者，禹也」。

② 勤王家：『書經』武成に「王季其勤王家」。また，題目<sup>①</sup>の朱注もこの語を引く。

③ 貽謀：『禮記』表記に「詩云，豐水有芑，武王豈不仕，詒厥孫謀，以燕翼子，武王蒸哉」として『詩經』大雅・文王有聲の詩を引用し，その鄭注に「貽は遺なり。……乃ち其の後世の子孫に遺るに，善謀を以てし……」。

④ 積功累仁：題目<sup>①</sup>の朱注に「此言文王之事，書言王季其勤王家，蓋其所作，亦積功累仁之事也」。

⑤ 修德凝命：『中庸章句』第二十七章「故君子尊德性，而道問學」条の朱注に「二者，修德凝道之大端也」。「凝命（命を凝む）」としては、『周易』鼎卦・大象傳に「君子以正位凝命」。

⑥ 天命未迓：『文選』卷四十九・干寶「晉紀總論」に「於是天下三分有二，猶以服事殷，諸侯不期而會者八百，猶曰，天命未至……」。李善注に引く『史記』に「武王至於孟津，諸侯皆曰，帝紂可伐。武王曰，天命未至也」。『史記』周本紀には「是時，諸侯不期而會孟津者八百諸侯。諸侯皆曰，紂可伐矣。武王曰，女未知天命，未可也。乃還師歸」。

⑦ 三分之業：『論語』泰伯に「……三分天下，有其二，以服事殷……」。

⑧ 帝命未新：『詩經』大雅・文王に「文王在上，於昭于天，周雖舊邦，其命維新，有周不顯，帝命不時，文王陟降，在帝左右」。

⑨ 一張一弛：『禮記』雜記下に「張而不弛，文・武弗能也，弛而不張，文・武弗爲也，一張一弛，文・武之道也」。

莫爲於後，前將何傳，述之無其人可乎，惟我文王，以武王而爲子，子則聖子也，故其所以篤孝思者，可以光德澤，可以顯文謨，應天而順人，孟津之師衆以集<sup>④</sup>，戡禍而定亂，牧野之干戈以興，由天威之肅將<sup>⑤</sup>，積而爲執競之武功，九

年大統<sup>⑦</sup>，因之以集矣，由多方之誕受<sup>⑧</sup>，擴而為混一之規模，百年德化，因之以治矣<sup>⑨</sup>，子而述之如此，則凡文王之一志一事，孰非武王所繼者耶，

①孝思：『詩經』大雅・下武に「永言孝思，孝思惟則」。

②文謨：『書經』君牙に「嗚呼，丕顯哉，文王謨，丕承哉，武王烈」。

③應天而順人：『易』革卦・彖傳に「湯・武革命，順乎天而應乎人」。

④孟津之師衆以集：『史記』周本紀に「是時，諸侯不期而會孟津者八百諸侯」。

⑤天威之肅將：『書經』泰誓上に「皇天震怒，命我文考，肅將天威（肅みて天威を將わしむ），大勲未集」。

⑥執競：『詩經』周頌・執競に「執競武王，無競維烈（競を執る武王，競こと無からんや維れ烈）」。

⑦九年大統：『書經』武成に「惟九年，大統未集」。

⑧多方之誕受：『書經』泰誓下に「惟我有周，誕受多方（誕に多方を受く）」。

⑨百年德化，因之以治矣：『孟子』公孫丑上に「曰，若是則弟子之惑滋甚。且以文王之德，百年而後崩，猶未洽於天下，武王・周公繼之，然後大行」。

夫父以作之，則王季者，固先文王而憂其憂者也，

子以述之，則武王者，寔後文王而憂其憂者也，

前後得其人，而上下無所累，

文王之無憂，孰非道之當然者乎（『制義文統類篇』第十體・段落題類・「父作之子述之」条）。

趙國麟の『制義文統類編』（雍正六年〔一七二八〕刊）は、この題目を、

文王之憂無きを論じて、申べて之を賛す（『制義文統類篇』第十體・段落題類・「父作之子述之 商輅」条・商二）。

と理解する。そして、商輅の八股文の起講（小講）の部分を次のように解説する。

題は是れ文王之憂無きを申し、[題目の] 上 [の「無憂者，其惟文王乎」] を離れざるを申ぶ。宜しく前 後に跟着て<sup>つ</sup>繳るべし。故に小講（起講）の首句（欲知文王之無憂）は、「文王 [之] 無憂」に跟着て起こす。「欲知」二字を用うるは、便ち是れ本題（「父作之子述之」）<sup>よ</sup>従り送りて上文（「無憂者，其惟文王乎」）に跟着。上文に連なるに非ざるなり。細心に體會し、當に之を自得すべし。[題目の] 兩句は各々是れ正單題①なり。自ずから宜し

く渾擒②もて繭を作るべし③。「有頼」二字は「作」・「述」を渾擒して繭を作るなり。人 皆な父・子有るも、即ち「上下有頼」と云う可からず。惟だ「父作」・「子述」のみは、方に「有頼」と云う可し。故に「上下有頼」四字は、確として是れ本題もて渾擒し、混じて上二句に到らずして去くなり。細心に體會し、當に之を自得すべし（『制義文統類篇』第十體・段落題類・「父作之子述之 商略」条・商二）。

①趙國麟の『制義綱目』（雍正六年〔一七二八〕刊）に「滾・截・綱目・呼應・瞻・折の段落の分かつ可き無き者を正單題と爲す」（『制義綱目』不分卷・「題體總論 一曰單題」条・二葉）。

②『制義綱目』に「渾擒：題中の大意を將<sup>も</sup>って渾渾として擒起（領要を得る）するなり」（『制義綱目』不分卷・「文局總論 二曰擒」条・四十二葉）。

③『制義綱目』に「繭を作るの法は一語にして盡す可し。渾擒と曰う。蓋し虚を蹈めば則ち體無し、實を犯せば則ち用無し。虚ならず實ならずの間に正に體を立て用を致すの妙を得。繭は惟れ渾なり。故に能く絲の用を包む。擒は惟れ渾なり。故に能く絲の體を立つるなり」（『制義綱目』不分卷・「文脈總論 三曰獨繭抽絲」条・七十九葉）。また、「獨繭抽絲とは、一意もて底<sup>さいご</sup>まで到り、展轉して窮まらず、之を申べて愈々出で、之を引きて愈々長く、意 盡きて而る後に止まる者、是れなり。繭は猶お太極のごときなり。絲は猶お陰陽・五行・男女・萬物のごときなり。夫れ太極は一なるのみ。而して周子の圖を作るや、五有り。蓋し必ず是の如くし、而して後に太極の理 得て以て明らかに且つ盡くるなり。則ち五の未だ始めより一に非ざるなり。繭は絲に非ずして未だ嘗て絲に非ざるにあらず。絲は繭に非ずして未だ嘗て繭に非ざるにあらず。繭より絲を抽<sup>ひ</sup>く。絲 盡き、繭の理も亦た盡くるなり。然らば繭は即ち太極と謂うは可なり。絲は即ち陰陽・五行・男女・萬物と謂うは可なり。聖賢の言 一字に一字の理有り、一句に一句の理

有り。渾然たる一理と雖も、無多に屬するに似たり。然らば之を申べて愈々出で、之を引きて愈々長く、猶お繭の絲有りて、抽く可きがごときなり」(『制義綱目』 不分卷・「文脈總論 三曰獨繭抽絲」 条・七十八葉～七十九)。

この題目は、文王が憂うことのなかった人物であることを述べ、截去された上文の「無憂者、其惟文王乎、以王季爲父、以武王爲子」と結びついていることを示し、その上で截去された上文を題目の「父作之、子述之」に生かすべきである。そこで、この八股文の起講（小講）の「中庸引之曰、欲知文王之無憂、當觀上下之有頼（中庸 之を引きて曰く、文王の憂無きを知らんと欲せば、當に上下の頼る有るを觀るべし）」は、「文王之無憂」から説き起こしている。「欲知」二字を用いているのは、截去された「無憂者、其惟文王乎、以王季爲父、以武王爲子」の部分を目の部分から問い直そうとしているのである。截去された上文から連なり下がってきているのではない。また、この題目は、それだけで独立している正單題であるので、大意をとって要領をまとめる方法で論述すべきである。「有頼」二字は、「作」・「述」の大意をとってまとめている。人には父と子とがいるけれども、「上下有頼」とはいえない。この題目の「父作之、子述之」の時のみ、「有頼」といえるのである。したがって、「上下有頼」四字は、題目の意味するところだけを的確にとらえて、截去された上の部分には触れていないというのである。

前股（前比）は、次のように解説する。

小講（起講）は「有頼」二字を以て繭を作る。[そのため] 即ち「是故」二字を用いて直ちに[下に] 接し、「莫為于前、後將何述」を領起（引き起こす）し、「頼」字を緊頂（しっかりと支える）し抽絲①して、反って「作之」二字を引出し、一大開②を作る。「惟我文王、以王季而為父」は、上文を領清して轉③を作り、「作」字を實疏④す。……先に「勤王家」・「積功累仁」・「修徳凝命」を説き、後に「三分之業」・「發其源」・「九州之大、開其端」を説く。「作」字の本末體用 脩（備）われり。單に王業を説く者は固より非

なり、即ち単に經國の事業を説く者も亦た非なり。「述之」〔を解釈した後〕比も亦た然り（『制義文統類篇』第十體・段落題類・「父作之子述之 商輅 条・商二）。

①『制義綱目』に「抽絲とは、通篇 一意を引申す、是れなり」（『制義綱目』不分卷・「題體總論 一曰單題」条・四葉）。

②『制義綱目』に「此の意を明らかにせんと欲し、而して先ず彼の意に即して以て之を發するを開と曰う」（『制義綱目』不分卷・「題氣總論 十曰開合」条・二十九葉）。

③『斯文規範』に「凡そ水の行くは必ず轉折有り。方に曲水の流長の妙を見れば、則ち之を文に通づ。凡そ文中の正意 已に盡くれば、必ず更に一層を起こし轉折す。方に曲がりて致す有り。<sup>すなわ</sup>就ち水の轉折して曲水の流長の妙を見ると相い似たり。故に之に名づけて「轉」と曰い、其の又た更に轉じて一灣（まがる）するを言うなり」（『斯文規範』卷之七・八葉・「一曰轉」条）。

④『制義綱目』に「疏は、疏して之を通ずの謂いなり。亦た疏して之を明らかにするの謂いなり。起より以て止に至るまで、皆な疏するなり」（『制義綱目』不分卷・「文局總論 五曰疏」条・四十九葉）。

起講（小講）は「有頼」二字を用いて繭を作った（大意をとって要領をまとめた）ため、前股（前比）では、それを受けて「莫為于前、後將何述（前に為す莫く、後 將に何をか述べん）」と展開する。起講の「頼」字をしっかりと押さえて、そこから「作之」二字を引き出して開を作る。「惟我文王、以王季而為父（惟れ我が文王、王季を以て父と為す）」は、上文を受けて新たな展開を行なって、「作」字を疏通させる。先に「勤王家」・「積功累仁」・「修德凝命」を説いて、後で「三分之業」・「發其源」・「九州之大、開其端」に言及するのは、本末體用が整っている。王業のことのみに説くのはいけないし、經國の事業のみに説くのもいけない。「述之」を解釈した後股（後比）の部分も同じであるという。

また、股尾は「無憂」の二字を用いないで、「無憂」の意味をだしているとする



る。

股尾は「文王」に収め歸す。題原を回顧して、却って是の「無憂」意に止まり、「無憂」字を出ださず。仍お本題に歸り、捻結の地歩を留下す。極めて含蓄有り、極めて次第有り。(『制義文統類篇』第十體・段落題類・「父作之子述之 商輅」条・商三)。

清朝の趙國麟は、以上のように商輅の八股文を解釈した。個々の技法などを詳しく検討してゆけば、趙國麟のような解釈も可能であろう。だが、ここに書かれている題目の解釈の内容から見てゆけば、經書を踏まえて、前股で王季の、後股で武王の事績を説明したものであり、題目の意味を敷衍したものと言える。

ちなみに、商輅から百年ほど後の張居正（字は叔大，号は太岳，諡は文忠。江陵の人。嘉靖四年〔一五二五〕～萬曆十年〔一五八二〕。嘉靖二十六年〔一五四七〕年丁未科二甲九名の進士）の『四書直解<sup>(2)</sup>』では、この箇所を次のように理解している。

這一節は是れ周の文王の事を説けり。作は是れ創始なり。述は是れ繼述なり。子思 孔子の言を引きて〔以下のように〕説けり。古の帝王より、創業・守成 皆な未だ心の去處に足らざる事有るを免れず。足らざる所有れば、則ち憂慮を生ず。是れ憂慮する所無きが若き者は、其れ惟だ周の文

(2)『四書直解』は、『中國古籍善本書目』（經部・332頁～333頁）に明代の七種類の刊本が著録されている。また、禁書にもなっていない。しかし、『四庫全書總目提要』には取り上げられない。『四書』を直解しただけのまったく価値のない書物と考えられたためであろうか。『續修四庫全書總目提要』が編纂されて、ようやく解題が書かれる。その解題を担当した倫明は、次のように述べる。

明の張居正撰。〔張〕居正 講官と爲りし時、『四書直解』を著し進呈す（徐乾學「四書集註直解序」）。其の書「先ず四書章句を標舉して綱と爲し、朱註を次にし、直解を次にす」（同上）。「句ごとに櫛べ、字ごとに比べ」（同上）、大都 平實なり。康熙丁巳（康熙十六年〔一六七七年〕）、徐乾學 是の書を重刊す。又た吳郡の「顧夢麟の『説約』原文を取り、細字を以て其の上に纂す」（同上）。卷首に徐乾學の序有り①、〔張〕居正の進講章疏を附す。又た四書直解看書法を附するも、甚だ淺陋なり。何れの人のか作なるかを知らざるなり（『續修四庫全書總目提要』經部・四書類・「四書集註直解説約七卷」条）。

①徐乾學の文集である『憺園集』には、この序文は収められていない。

なお、拙稿では、康熙十八年（一六七九）序・醉畊堂刻『重刻張閣老經筵四書直解』を用いる。

王なるか。何を以て之を見るや。凡そ前人 曾て造作せざれば、自己 便ち開創の勞有り、後人 承繼に堪えざれば、將來 便ち廢墜の患有り。二者 皆な憂う可きなり。惟だ是れ文王のみ王季の賢を以て之を父と爲し、武王の聖を以て之を子と爲す。王季 功を積み仁を累ねて周家の基業を造り、文王の要<sup>なすべき</sup>做<sup>も</sup>の事を將<sup>な</sup>つて、豫め先に做<sup>な</sup>し了<sup>おわ</sup>れり。これは是れ「父作之」なり。武王 志を繼ぎ事を述べ、周家の大統を集め、文王 未だ成さざるの事を將<sup>すべ</sup>て、都て成就<sup>おわ</sup>し了<sup>こ</sup>れり。これは是れ「子述之」なり。既に賢父有りて以て之を前に作し、又た聖子有りて以て之を後に述ぶ。文王の心 更に一些<sup>いささか</sup>の足らざる處有る無し。此れ其の憂無き所以なり（『重刻張閣老經筵四書直解』中庸・卷二・「子曰、無憂者其惟其惟文王乎、以王季爲父、以武王爲子、父作之子述之」条・十九葉）。

「父作之」は、文王の父の王季が「功を積み仁を累ねて周家の基業を造り、文王の要<sup>なすべき</sup>做<sup>も</sup>の事を將<sup>な</sup>つて、豫め先に做<sup>な</sup>し了<sup>おわ</sup>れり」ということであり、「子述之」は、子の武王が「志を繼ぎ事を述べ、周家の大統を集め、文王 未だ成さざるの事を將<sup>すべ</sup>て、都て成就<sup>おわ</sup>し了<sup>こ</sup>れり」ということであったというのである。

このように、朱注にしたがい「句ごとにべ字ごとにべ」て直解された『四書直解』の理解と、商輅の解釈とは同じようなものとなっている。このことから、商輅のこの八股文は、題目を敷衍したものであるといえるのではないだろうか。

#### （四）正統年間

##### 陳獻章

陳獻章（字は公甫、号は石齋、晩年には紫水歸人と号す。萬曆十三年〔一五八五〕に孔子廟に従祀され、文恭と諡される。廣東新會白沙里の人。宣德三年〔一四二八〕～弘治十三年〔一五〇〇〕。正統十二年〔一四四七年〕の舉人）は、郷試に挙げられた後、會試には最後まで及第しなかった。成化二年（一四六六）、太學を再訪問し、祭酒の邠讓に認められ、都にいる名士と交流を結び、翌年春に

帰郷する。成化十八年（一四八二）に推薦され、吏部に試用されるが、辞退して帰郷し、弘治十三年（一五〇〇）二月初十日に亡くなる。七十三歳であった

俞長城は、陳獻章を次のように評価する。

道學を言う者は、風流（しゃれた味わい）を細く。<sup>しりぞ</sup>風流を言う者は、道學を細く。晉は虚にして宋は迂なり。參商（『左傳』昭公元年に基づく：対立して）相い背くは、惑うの甚だしき者なり。謝安石（謝安）の桓温〔の計画〕を折き（『世説新語』雅量/『晉書』謝安傳），王右軍（王羲之）の殷浩を戒むるは（『晉書』殷浩傳），風流なり。何ぞ嘗て道學ならざらんや。周子（周敦頤）の「吟風弄月」（『伊洛淵源錄』/『宋史』卷四百二十七・道學傳一），邵子（邵雍）の飲酒栽花は，道學なり。何ぞ嘗て風流ならざらんや。道とは行う所，學とは法る所，風とは傳うる所，流とは化する所，四字 一を缺くも名士と成らず。陳白沙（陳獻章）先生 學を東南に倡え世の儒宗と爲る。吾（俞長城） 其の文は必ず方正嚴肅にして，確として犯す可からずなるかと疑う。今，其の集を誦むに，瀟灑にして度有り，「顧盼（振り返って見る）して姿を<sup>かたち</sup>生<sup>な</sup>」（嵇康「贈秀才入軍」第一首）し，腐風 之が爲めに一洗す。吾（俞長城） 固より人の其の絶に<sup>いた</sup>造りし者は，未だ嘗て兼ねる所有らざるにあらずを知るなり。道學の絶なる者の風流を兼ねるは，吾 其の人を求め，其の文に合うは，其れ陳白沙（陳獻章）なるか。風流の絶なる者の道學を兼ねるは，吾（俞長城） 其の人を求め，其の文に合うは，其れ唐伯虎（唐寅）なるか（俞長城「題陳白沙稿」『可儀堂一百二十名家制義』卷之三・二葉～三葉・「陳白沙稿」条）。

道學と風流とを兼ねた人物として陳獻章を唐寅と並べて評価するのである。

拙稿では、『欽定化治四書文』で，

<sup>わずか</sup>寥々なる數語もて已に古今の利病を括盡（束ね尽す）す。風韻（風格）

淡宕（穩やかで心地よい）にして言外の味有り（『欽定化治四書文』下孟・二十葉・「古之爲關也 一節」条評語）。

と評される八股文を検討してみたい。題目は，

孟子曰、古之爲關也、將以禦暴（朱注）譏察非常、今之爲關也、將以爲暴（朱注）征稅出入、○范氏曰、古之耕者什一、後世或收大半之稅、此以賦斂爲暴也、文王之囿、與民同之、齊宣王之囿、爲阱國中、此以園囿爲暴也、後世爲暴不止於關、若使孟子用於諸侯、必行文王之政、凡此之類、皆不終日而改也（『孟子』盡心下）。

の太字で示した箇所である。なお、この八股文もいわゆる八股（提股・中股・後股・收股）の箇所が、前股と後股とによって展開する形式をとっている。

大賢<sup>①</sup>於古今之爲關者<sup>②</sup>、而深有所慨焉、  
夫關以禦暴、非以爲暴也、古人有立法之意<sup>③</sup>、而今則失之<sup>④</sup>、亦可悲也已、  
孟子有慨於王政之不行而歎曰、先王無一事不爲民、而設亦無一事不爲民而善也、奈何古人往矣、而今之所爲、有不皆古者、豈古今之有二乎哉、人自爲古今也、

①大賢：孟子の代字。拙稿「清代八股文における破題・承題について」（『經濟理論』第312号・2003年刊）の「(2) 破題における代字」参照。

②爲關：題目に「古之爲關也、將以禦暴、今之爲關也、將以爲暴」。

③立法之意：『孟子』滕文公下「能言距楊墨者、聖人之徒也」の朱注に「聖人救世立法之意、其切如此」。

④也已：殖學齋編訂『舉業辨字』（不分卷・歇語辭第七・三十四葉）に「上文に順落し、其の此れに止まるの意を明らかにす」。

是故設關於道古之制也、

古人所設之關、與今人之關一也、但古人之所以爲此者、其法爲公而不爲私、謹其啓閉焉耳<sup>①</sup>、詢其符節焉耳<sup>②</sup>、蓋以不如是、不足以禦天下之暴、惟暴有所不容、斯禁有所必設、使天下之異言異服者<sup>③</sup>、至此而有譏焉<sup>④</sup>、有察焉<sup>⑤</sup>、斯已矣<sup>⑥</sup>、是名有所禦、而實有所便也、

①焉耳：殖學齋編訂『舉業辨字』（不分卷・歇語辭第七・三十四葉）に「平提して順落するの辭」。

②符節：『孟子』離婁下「得志、行乎中國、若合符節」の朱注に「符節、以玉爲之、篆刻文字而中分之、彼此各藏其半、有故、則左右相合以爲信也」。

③異言異服：『孟子』梁惠王下「昔者文王之治岐也、耕者九一、仕者世祿、關市譏而不征……」の朱注に「關、謂道路之關。市、謂都邑之市。譏、察也。征、稅也。關市

之吏，察其異服異言之人，而不征商賈之稅也」。

④有讖：③参照。

⑤有察：③参照。

⑥斯已矣：『禮記』檀弓上に「曾子曰……吾得正而斃焉，斯已矣（吾 正を得て斃れれば，斯に已まん）」。

夫何今之不然也，

今之所設之關，與古人之關一也，但今之所以爲此者，其利在官而不在民，羈其去留者有焉，限其出納者有焉，蓋以不如是，不足以盡天下之利，惟利有所必取，斯禁有所不弛，使天下之貨出賃入者，至此而有征焉，有稅焉，斯已矣，是始以禦人之暴，而終於自爲暴也，

①限其出納者：『論語』堯曰に「猶之與人也，出納之吝，謂之有司」とあり，その朱注に「猶之，猶言均之也。均之以物與人，而於其出納之際，乃或吝而不果，則是有司之事」。

②使天下之于出于入者，至此而有征焉，有稅焉：題目<sup>①</sup>の朱注に「征稅出入（出入に征稅す）」。

③爲暴：題目参照。

①吁，何古人之不類今人，

何今人之不學古人哉，

今人不學古人，吾不之憾，而至於今之民不得蒙古人之政，吾獨悲其遭之不幸也，有今日之責者，其思所以爲古乎，其思所以爲今乎（『欽定化治四書文』下孟・二十葉・「古之爲關也 一節」条）。

①吁：殖學齋編訂『舉業辨字』（不分卷・歎語辭第六・三十二葉）に「長歎なり。又た疑い怪しむの聲なり。凡そ意の否する所の者の發するの聲は多く吁なり」。

先ず，この箇所は，どのように理解されていたのかを陳獻章から百年ほど後の張居正の『四書直解』によって，見てみよう。

関は即ち今の各處の鈔関（税関）なり。孟子 [以下のように] 説けり。  
事 古に在りては良法と爲り，今に在りては敝政と爲る者有り。特に大なる者のみ然りと爲さず。即ち関市も亦た見る可き者有り。何となれば，古の関を爲す者，「重門擊柝（門を重ねて柝を撃ち）」（『易』繫辭下），時を以

て啓閉す。故に異言する者有れば則ち之を譏察し、異服する者有れば則ち之を譏察し、將に以て暴客を禦止し①、常に非ざるを警備するのみ。初め未だ嘗て其の税を征して暴を為さざるなり。今の関を爲す者は、不謹を譏防し、税課を是れ圖る。商貨の出るは必ず征有り、商貨の入るは必ず征有り②。古人の暴を禦ぐの處は、適たま今人の暴を行なうの資と為るのみ。此の如きは安く<sup>やど</sup>行旅に次りに即くの安き有り③、商賈 途に出ずるの願いを懷くを望まんや。即ち是れ之を推せば、凡そ「私を以て公を壞<sup>ママ</sup>（害）し」（『左氏傳』文公六年・十一月）、利に困りて義を害する者は④、関市の一事に止まらず。世道 重んぜられず、慨く可けんや（『重刻張閣老經筵四書直解』孟子卷十四・盡心章句下・「孟子曰、古之爲関也、將以禦暴（朱注）譏察非常、今之爲関也、將以爲暴<sup>(3)</sup>」条・五葉～六葉：康熙刻本のこの部分は欠葉のため、萬曆元年〔一五七三〕序・何敬塘刻本による）。

①『孟子』梁惠王下「昔者文王之治岐也、……關市譏而不征……」の朱注に「關、謂道路之關、市、謂都邑之市。譏、察也。征、税也。關市之吏、察異服異言之人、而不征商賈之税也」。

(3) 清・康熙十六年（一六七七）刊の聖祖（康熙帝）御定①『日講四書解義』は、次のように解釈する。

此の一章は書するに是れ當時の横征の害を言うなり。孟子、[以下のように]曰う。先王の立法 本より深意有り。後人 察せず。往往に民を仁しむの制を以て、轉じて民を厲ましむ。[それを] 關を設くるの一事即して見る可し。古の關を爲す者は、原より以て非常に備う。第だ其の管鑰（かぎ）を謹しみ、其の啓閉を時とし、異服有れば、則ち之を譏べ、異言有れば、則ち之を察す。之を以て暴を禦ぎ、居る者・行く者をして、以て各々事とする所に安んぜしむ。未だ征税を以て務めと爲すを聞かざるなり。乃ち今の關を爲す者は、盡く古人の意を失えり。凡そ商賈の來る・行旅の至るに、出るや征有り、入るや税有り。譏察を以て事と爲さず、惟だ税課のみ是れ急なり。先王の暴を禦ぐの具を擧げて、適たま今人の暴を行なうの資と爲す。其の途に出る者は、豈に幸い有らんや。夫れ一つの關の設くるに即きて、古今の相い懸たること此の如し。昔 良法と爲り、今 弊政と爲る。本原 正しからざれば、往くとして先王の意を得る無しは、獨り一つの關のみならざるを見る可し（『日講四書解義』卷之二十六・孟子下之八・盡心章句下・九葉～十葉・「孟子曰、古之爲関也、將以禦暴、今之爲関也、將以爲暴」条）。

①聖祖（康熙帝）御定となっているが、実際には熊賜履が書いたようである。これについては拙稿「青年康熙帝の学力と官僚」（『経済理論』第308号・2002年刊）69頁・注（4）参照。

②『孟子』盡心下・「古之爲關也」章の朱注に「征稅出入（出入に征稅す）」。

③『易』旅卦・六二爻辭に「六二，旅即次（旅のとき次<sup>やど</sup>りに即く），懷其資，得童僕貞」。

④『論語』子罕「子罕言利，與命與仁」条の朱注に「程子曰，計利則害義……」。

『四書直解』によると、先ず古今の關を作る理由の違いを述べ、そして、そこから「凡そ「私を以て公を壞（害）し」（『左氏傳』文公六年・十一月），利に因りて義を害する者は、関市の一事に止まらず。世道 重んぜられず、慨<sup>なげ</sup>く可けんや」と孟子は言いたかったとする。

陳獻章の八股文も、『四書直解』の理解と同じように展開される。先ず、破題・承題・起講において、この題目は、孟子が古・今の關の役割の違いを慨いたと解釈したことを言う。そして、それを前股と後股のみを用いて展開し、前股で古の關を爲<sup>つく</sup>る意味を述べ、後股で今の關を爲<sup>つく</sup>る意味を述べ、結句でそれを慨嘆するという構造をとる。それを詳しく見てゆくと次のようになる。

破題で「大賢 古今の關を爲<sup>つく</sup>る者に於いて、深く慨<sup>なげ</sup>く所有り」とし、承題で「夫れ關は以て暴を禦ぎ、以て暴を爲<sup>な</sup>すに非ざるなり、古人 立法の意有り、今[人]は則ち之を失えり、亦た悲しむ可きなり」と承け、起講で「孟子 王政の行なわれざるを慨くこと有りて歎じて曰く、先王 一事の民の爲<sup>ため</sup>にして設けざる無し、亦た一事の民の爲<sup>ため</sup>にして善ならざる無きなり、奈何ぞ古人の往かん、而して今の爲<sup>な</sup>す所、皆な古ならざる者有り、豈に古今の二有らんや、人 自ら古今を爲<sup>な</sup>すなり」と言う。

そして、前股で「是の故に關を道に設くるは、古の制なり、古人の設くる所の關と今人の關と一なり、但だ古人の此れを爲<sup>つく</sup>る所以は、其の法 公を爲<sup>な</sup>して私を爲<sup>な</sup>さず、其の敝閉を謹しみ、其の符節を詢<sup>と</sup>う、蓋し以て是の如くせざれば、以て天下の暴を禦ぐに足らず、惟だ暴のみ容れざる所有り、斯れ禁ずるに必ず設くる所有り、天下の異言・異服なる者をして、此に至りて譏<sup>しら</sup>べる有り、察<sup>み</sup>る有り、斯<sup>ここ</sup>

に已まん、是れ名 禦ぐ所有り、實 便とする所有るなり」として、古の關を爲す意味を述べる。

後股で、「夫れ何ぞ今の然らざらんや、今の設くる所の關と古人の關と一なり、但だ今の此れを爲る所以は、其の利 官に在りて民に在らず、其の去留を羈ぐ者は有り、其の出納を限る者は有り、蓋し以て是の如くせざれば、以て天下の利を盡すに足りず、惟だ利のみ必ず取る所有り、斯れ禁ずるに弛めざる所有り、天下の貨出・貨入する者をして、此に至りて征有り、税有り、斯に已まん、是れ始めは以て人の暴を禦ぎ、終に自ら暴を爲すなり」として、今の關を爲る意味を述べる。

結句で、「吁、何ぞ古人の今人に類せず、何ぞ今人の古人に學ばざるや、今人の古人に學ばざる、吾れ之を憾（物足りなく思う）みず、而れども今の民の古人の政を蒙むるを得ざるに至るは、吾れ獨り其の遭の不幸を悲しむ、今日の責有る者、其れ古を爲す所以を思わんか、其れ今を爲す所以を思わんか」と慨嘆するのである。

このように内容から見てみると、陳獻章のこの八股文は、忠実に朱注にしたがって本文を解釈している『四書直解』の理解と同じように題目の部分を解釈し、それを敷衍して書かれているといえるのではないだろうか。

(つづく)